

Joint storytelling を採用した児童英語指導法の体得

多田さおり

TADA Saori

幼児・児童など英語に初めて触れるであろう学習者の初期リテラシーの確立においてまず優先されなければならないのは、英語と日本語の音の違いや英語独特の音のルールへの認識を高めるための、音韻認識(phonemic awareness)の確立である(リーバー, 2008; 吉田, 2012; アレン玉井, 2013 他)。

本稿では保育士・幼稚園教諭・小学校教諭・特別支援教諭を目指す学生を対象に、よく知られている昔話を題材にして、英語の歌やチャンツで構成された joint storytelling を最終発表として採用した音韻認識の確立と児童英語指導法の体得のためのカリキュラムの実践報告と学習の成果報告を行う。

キーワード: joint storytelling、児童英語、音韻認識、シラブル、フォニックス、ナーザライム

1. はじめに

アレン玉井(2013)は、グローバル社会で通用する英語コミュニケーション能力を獲得するための初期リテラシー指導で重要となるボトムアップ的な力の育成において、アルファベットの大文字・小文字の認識の次に音韻認識能力を向上させることを挙げている。リーバー(2008)においても、児童英語で一番優先されなければならないのは音韻認識能力であるとしている。子どもに文字を教える前に話し言葉に注目させ、耳を鍛えるという音韻認識能力の理論を教えることで、読み書きの学習への土台ができる。現在小学校などでよく用いられているフォニックスと混同されがちであるが、フォニックスが言葉の音と文字をつなげることでアルファベットと発音の関係を学ぶものであるのに対し、音韻認識はフォニックスを始める前に、話し言葉が個々の音の集合であるという認識を持つことであり、まずは音節レベル(例: lionならli /onの2音節から成る)、その次にonset-rime(例: pigならpがonsetでigがrime)そして音素レベル(例: bigならb/i//g)へと認識が発達すると言われている(Adams, 1990; Yopp, 1992など)。また、小学校指導要領・外国語活動には「外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに

に、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする」とあるが、吉田によると、これは音韻認識・音素認識双方に言及したもので、フォニックス指導の前に英語と日本語の音やリズムの違いに気づかせるための機会を与えることが必要であるとされる。

本学の学生は、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭・特別支援教諭を目指しているが、その大半は幼児教育現場へ就職していく。多くの幼児教育現場において、英語が指導される時間はまだまだ限られたものであり、また多くの英語指導はネイティブ教員が担当していることも事実である。このような限られた現状のニーズに対し、英語の初期リテラシーの理論及び英語教育の枠組みなどの解説を深く行うよりも、現場に出た際に「ネタ」としてすぐに活用できるマテリアルを提供し、その体得を目指したカリキュラムを組む方が学生にとって得であると考え。また昨今の調査で、日本の大学生で十分な音声指導を受けてきていないと感じている学生が多く存在することが分かっている(太田, 2012)。おそらく多くの学生にとって音韻認識学習自体が未習、もしくはじっくり学習されていない事項であることを踏まえ、半期という短い期間で順を追った音韻認識獲得方法を体得し、その中で少しでも多くのマテリアルを紹介するため、実際に学生が幼児・児

童の立場となって学習してみることが一番の近道であると著者は考える。自分でその学習法を通して学びを体得していくことにより、習得のために必要な練習や学習のプロセスで重要なこと、つまづきやすい箇所などにも気づくことができる。また、英語に苦手意識を持つ学生も多いため、無理なく楽しく取り組めるレベルの英語用いた学習を通して達成感を持つことは英語自体への嫌悪感を減らし、興味を持つきっかけにもつながると考える。

教材を紹介するだけでなく実際に現場で使えるようになるレベルまで体得するには、繰り返し練習と、それを飽きずに行うためのゴール設定が必要であると考える。そのゴールとして、アレン玉井の考案した joint storytelling (ジョイント・ストーリーテリング) を用いることとした。これは、物語を通して文脈の中で英語を教える指導法である。日本人であれば誰もが知っている昔話を、簡単な英語のチャンツや替え歌を通して語ることで、英語をなんとなく理解することができる。また、ジェスチャーをつけて演じながら英語を言うことは目的を持った繰り返し練習につながり、最終的に自然と英語を口ずさめるまでになる。これは、“リタラシー 教育の根本は音声教育にある。豊かな音声を聞き、そしてそれを自らの口で言うことにより、児童は少しずつ英語という新しい言語に慣れていく。どのような言語であれ、その言語の基本的な音の流れや、母語と異なる音に気づくには多くの音を聞く必要があり、良質の英語のインプットを十分に確保することが大切” であるというアレン玉井の見解に基づいたものである。故に、音声言語を育てるために必要な良質のインプットとアウトプットを兼ね備えた指導法である joint storytelling は、音韻認識能力体得のための一つの目標として最適であると言える。

2. 授業の展開

吉田他(2012)の「音素と音韻の気づきに基づく小学校ならび中学校入門期における英語指導」を元に、カリキュラムを作成した。

表1：授業内容

授業時	授業内容
1回目	バナナチャンツ・シラブル拍の明示的説明・ナーザリータイム①“Incy Wincy Spider”
2回目	シラブル拍の手拍子カウント・ナーザリータイム②“Rainbow Song”
3回目	チャンツ“Pat-a-cake”・フォニックスの説明(英語教師に向けた紹介動画鑑賞)
4回目	フォニックスアルファベット・フォニックスかるた・Joint Storytelling“The Giant Turnip”導入
5回目	Joint Storytelling“The Giant Turnip”役決めとお面作り
6回目	Joint Storytelling“The Giant Turnip”全体で歌とセリフの練習
7回目	Joint Storytelling“The Giant Turnip”グループ別練習
8回目	Joint Storytelling“The Giant Turnip”発表

2-1. バナナチャンツ

音韻認識への導入として、英語と日本語の違いに気づかせるためによく使用されるチャンツを使用した。外来語であるバナナ、チョコレートなど英語として認識しているが日本語発音されている単語の日本語発音と英語発音を「バナナじゃなくて、banana!」というようにリズムに乗せて聞いたり言ってみたりする教材である。英語特有の音やアクセントがいつの間にか身に付くことを狙った教材である。

2-2. モーラ拍とシラブル拍の違いの明示的な解説と手を叩いて音節に分ける練習

西原(2008)によると、教師の解説などなくとも、手拍子で感覚をつかむ練習を重ねるだけでシラブル拍を理解することができるかとされるが、大学生という認知レベルの高い学習者であり練習の機会も少ないため、多少の明示的な説明を付け加えた。/dog/とホワイトボードに書いたものを学生に発音させると「ドッグ」と読むので、「この単語に音はいくつ入っていますか」という質問を投げる。モーラ拍でカウントするとド・ッ・グという3音であるが、シラブル拍では1音である。1つもしくは2つ重なっている母音(二重母音)を一つ含む子音と母音の音の連なりが1シラブルであると解説を行う。a/e/i/o/uとホワイトボードに表記し、学生に/dog/の中にある母音を聞くと/o/であると言い当てることができる。/dog/の中に母音は一つしかないので1シラブルであるとわかる。その後、動物や色など、児童英語でよく用いられる単語を用いて手拍子でシラブルに分ける練習を行う。ペアを組ませて立たせ、正しく手拍子読みができたなら座れる活動などを行うと、学生はすぐに感覚をつかんでいく。

2-3. 歌・チャンツを使用し、英語の音やリズム、イントネーションに慣れ親しむ

チャンツやナーサリー・ライム（英語のわらべ唄）は、その幼稚さから成人の学習者にはなかなか取り組みにくい活動であるが、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭・特別支援教諭を目指す学生であるため、幼児・児童用の歌やリズム読みなども抵抗なく活動を行うことができた。手拍子読みで使った色の単語を歌（rainbow song）につなげるなどすると、美しく発音して歌うことができるので高い達成感が得られる。フリをつけて英語をリズムよく言ったり、歌ったりする活動でリズムやイントネーションに慣れていく。後に行うjoint storytellingへの準備ともなる活動である。

2-4. フォニックスの解説・活動

指導の流れとして、joint storytellingを最後に持ってきたかったため、先に音素認識の活動であるフォニックスの活動を取り入れた。明示的な説明にはmpi代表松香洋子のYouTubeでの解説を使用した。その後、フォニックスアルファベットのチャンツを導入・練習したのち、フォニックスかるた（3文字言葉のカードを並べて、音素で読み上げかるた取りをする活動）で音素を意識させる。

2-5. Joint Storytelling

今回は一番代表的なJoint Storytellingの題材、「大きなかぶ」"The Giant Turnip"を利用した。他の題材、「ももたろう」、「浦島太郎」、「うさぎとかめ」などに比べ、登場人物が多く、すべての登場人物のセリフの比重がほぼ同じであることが40名以上の学生と行うにあたって非常に適していたことが「大きなかぶ」"The Giant Turnip"を選択した理由である。本学の学生は絵や工作が非常に得意なため、お面作りを取り入れた。英語活動にこのような作業を取り入れることで活動への思い入れを強くすることにも役立てたい示唆がある。幼児に実際に行わせる際にも適したプロセスであると考えられる。また、グループで行い、自分の役を持つことで責任感が生まれることも、モチベーション向上へつながると考える。「大きなかぶ」では、各配役のセリフがほぼ同じであるので全体練習を問題なく行うことができる。教師が全員を指導し、ある程度セリフや歌の正しい発音やリズムを習得してから個別練習にスムーズに移行できる。本番では、7つのグループを大きく二つに分け、見ている学生にピアレビューをさせた。ピアレビューを行うことで、評価される項目の意図や大切さに気づくことができる。（声の大きさ・アイ

コンタクト・発音・イントネーション・表情やジェスチャー）。また、友達に携帯電話を渡して動画を撮影してもらい、発表後にグループで見る時間を設けたのちに、発表してみた感想と、他のグループを見て気づいたことを書かせた。



3. 方法

調査期間：平成30年10月3日～1月30日

調査対象：保育士・幼稚園教諭・小学校教諭・特別支援教諭の短期大学2回生及び3回生40名

材料：調査用紙1部、発表後の感想記入用紙・調査票の質問は、学生がjoint storytellingの発表を終えた後にどのような英語の学び及び英語学習への意識の変化があったかを問うた。これらの項目において1～6点で評価を付けさせる。各項目の単純集計を行ったのち、肯定的評価（5・6）、中立的評価（3・4）否定的評価（1・2）で集計をまとめ傾向を観察する。また、感想用紙記入用紙は、joint storytellingの活動直後に配布し、①自分が発表してみた感想、②他のグループの発表を見た感想とした。感想の内容ごとに集計・報告を行う。

表2：調査票

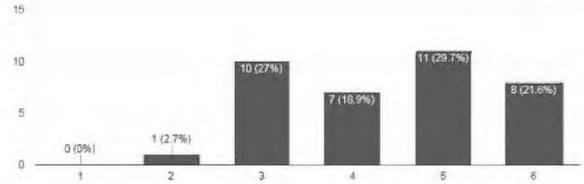
1	joint stolltellingを経験したことで、英語のリズムに慣れ親しむことができた
2	joint stolltellingを経験したことで、以前よりイントネーションよく英語を言えるようになった
3	joint stolltellingを経験したことで、以前より英語の発音がよくなった
4	joint stolltellingを経験したことで、英単語をスムーズに覚えることができた。
5	joint stolltellingを経験したことで、ジェスチャーや表情などもコミュニケーションにおいて大事であると感じた。
6	joint stolltellingに楽しく取り組めた。
7	joint stolltellingを経験したことで、達成感が得られた。
8	joint stolltellingを経験したことで、英語が以前より好きになった。
9	joint stolltellingを経験したことで、以前より英語に自信が持てるようになった。
10	joint stolltellingは児童が楽しんで取り組める英語活動だと思う。

4. 結果と考察

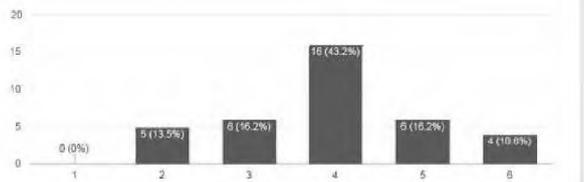
発表の後にgoogle formを用いてアンケートを行った。1～10の質問の回答傾向をグラフにて表示したのち、回答の傾向を肯定的評価（5・6）、どちらでもない評価（4・5）否定的評価（1・2）に分けて傾向の解説を行う。

表3：アンケート集計結果

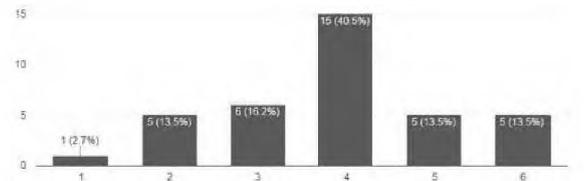
joint stolltellingを経験したことで、英語のリズムに慣れ親しむことができた
37件の回答



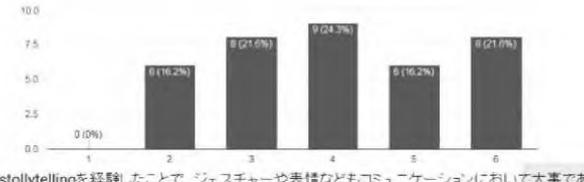
joint stolltellingを経験したことで、以前よりイントネーションよく英語を言えるようになった
37件の回答



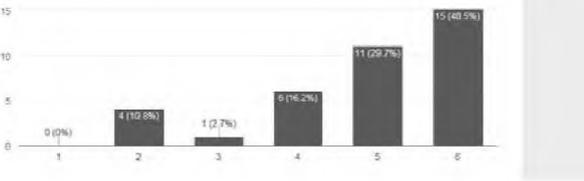
joint stolltellingを経験したことで、以前より英語の発音がよくなった
37件の回答



joint stolltellingを経験したことで、英単語をスムーズに覚えることができた。
37件の回答

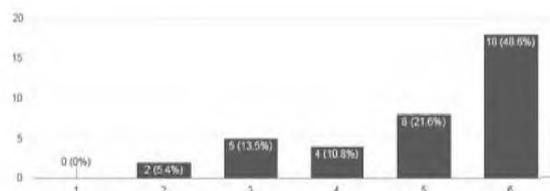


joint stolltellingを経験したことで、ジェスチャーや表情などもコミュニケーションにおいて大事であると感じた。
37件の回答



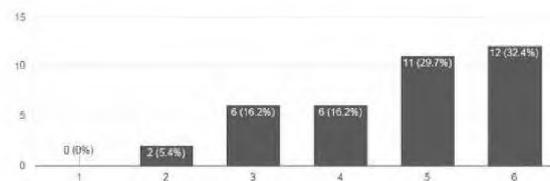
joint stollytellingに楽しく取り組めた。

37件の回答



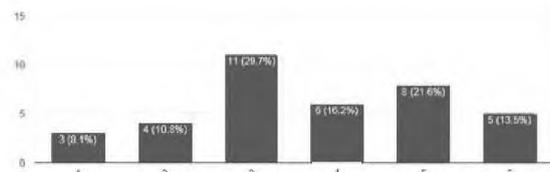
joint stollytellingを経験したことで、達成感が得られた。

37件の回答



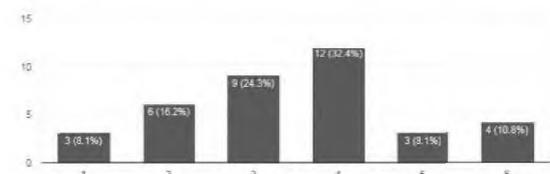
joint stollytellingを経験したことで、英語が以前より好きになった。

37件の回答



joint stollytellingを経験したことで、以前より英語に自信が持てるようになった。

37件の回答



joint stollytellingを教育現場で幼児・児童にやらせてみようと思う

37件の回答

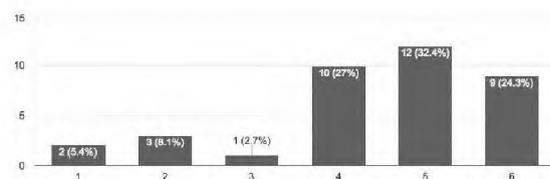


表4：アンケート集計結果一覧

		否定的(%)	中立的(%)	肯定的(%)
1	joint stollytellingを経験したことで、英語のリズムに慣れ親しむことができた。	2.7	45.9	51.3
2	joint stollytellingを経験したことで、以前よりイントネーションよく英語を言えるようになった。	13.5	59.4	27
3	joint stollytellingを経験したことで、以前より英語の発音がよくなった。	16.2	56.7	27
4	joint stollytellingを経験したことで、英単語をスムーズに覚えることができた。	16.2	45.9	37.8
5	joint stollytellingを経験したことで、ジェスチャーや表情などもコミュニケーションにおいて大事であると感じた。	10.8	18.9	70.3
6	joint stollytellingに楽しく取り組めた。	5.4	24.2	70.3
7	joint stollytellingを経験したことで、達成感が得られた。	5.4	32.4	62.1
8	joint stollytellingを経験したことで、英語が以前より好きになった。	18.9	45.9	35.1
9	joint stollytellingを経験したことで、以前より英語に自信が持てるようになった。	24.3	56.7	18.9
10	joint stollytellingを教育現場で幼児・児童にやらせてみようと思う。	13.5	29.7	56.7

アンケートでは「joint stollytellingを経験したことで、以前より英語に自信が持てるようになった」という項目を除いた全ての項目で否定的評価は20%を切った。肯定的評価が過半数を超えた項目を見ていく。「joint stollytellingを経験したことで、英語のリズムに慣れ親しむことができた」が肯定的評価に入っていることは、joint storytellingが音韻認識獲得に繋がる活動であることの裏付けになると考える。「joint stollytellingを経験したことで、ジェスチャーや表情などもコミュニケーションにおいて大事であると感じた」という評価は、非言語コミュニケーションスキルの大切さに気づけたことを示唆している。またモチベーションに関する項目である「joint stollytellingに楽しく取り組めた」「joint stollytellingを経験したことで、達成感が得られた」との質問でも肯定的評価がついていることから多くの学生が楽しんでやりきることができたと感じていることがわかる。この評価が、最後の質問である「joint stollytellingを教育現場で幼児・児童にやらせてみようと思う」の肯定的評価に繋がったのではないかと、自分たちで実際にやってみて、うまくできた経験は、活動を紹介するだけよりも実際に教育現場に生かしていくきっかけになるという示唆になったのではないかと。

表5：感想の内容種類別一覧

①自分が発表してみた感想	回答数
1 楽しかった	24
2 緊張を吹き飛ばす練習がたっくさん必要と感じた	18
3 英語を覚えられた	14
4 グループのために頑張れた	10
5 イントネーション、ジェスチャーの大切さに気づいた	8
6 子どももやりたくなる活動と感じた	6
7 知っているお話を英語で演じるのがよかった	5
8 人前で発表するのがいい経験になった	4
9 普段関わらない人たちと関わった	2

②他のグループの発表を見た感想		回答数
1	コミュニケーションにおける表情・ジェスチャーの大切さに気づいた	19
2	見ていて面白かった	15
3	楽しそうに演じるのが大事	14
4	自分たちの改善点に気づけた	11
5	英語らしい発音イントネーションの大切さに気づけた	10
6	声が大きいと聞こえとを感じる	10
7	笑顔で発表しているのが良かった	6
8	しっかり英語を覚えて言えていると伝わりやすい	6
9	チームで協力していた	4

次に、活動後に書かせた感想の傾向を見ていく。自分たちが発表した感想では、まず半数以上の学生が「楽しかった」と答えている。自分が楽しめた活動であれば、教育現場でも使ってみたいと思えるのではないかと。次に練習がたくさん必要だと感じたと言う学生も半数近くいるが、多くの学生が一部うまく言えなかったり、思い出せない箇所があったりした反省点によるものだと考えられる。緊張のため、練習で言えていたが本番ではできなかった経験は、実際幼児や児童に指導する際に伝えられる点であり、英語習得に必要な繰り返し練習の大切さに気づけたと取ることもできる。また、多くの学生が英語を覚えられたとも答えていることから、実際に活動を経験したことで指導法を知るだけでなく、指導に必要な英語の体得につながったのではないかと。他にもイントネーションやジェスチャーという音やリズムがコミュニケーションに及ぼす効果にも気づけていたほか、周りとの協力などjoint storytellingがもたらす非言語的教育要素も評価されていた。

他のグループの発表を見た感想だが、約半数の学生が表情やジェスチャーなど非言語要素のコミュニケーションにおける比重の大きさについて気づけたことがわかる。特に英語は日本語に比べてこれらの非言語要素がより豊かに使用される言語であるため、それがコミュニケーションにおいて大事であると実感できたことは大きな収穫であると考えられる。「見ていて面白かった・楽しそうであった」という評価も演じた時の感想と同様多くの学生が記述していた。自分たちの改善点に気づけたという評価も多くあったが、客観的に活動を見ることで、イントネーションや声の大きさ、笑顔、しっかり発音することなどがコミュニケーションを円滑にするためにそれぞれどのような役割を果たしているかを意識することができている。

5. まとめ

児童英語指導を現場で行うにあたって、指導する活動を自分で体験してみることは活動の到達目標や注意点、持ち上がるであろう問題点などに気づくことができる一番の近道であると著者は考える。また活動を体験し、楽しかった思いやうまくできなくて悔しかった思いなどは、現場に出た際に活動を実際に行ってみようというモチベーションにもつながるのではないかと。本学の学生が教育現場に出た際に深く英語活動に関わる可能性は低いかもしれないが、幼児・児童に対してどのような教材を選び、それをどのように提示していけば良いかという知識は、それがただネイティブ教員の補助をするだけというような場合でも、英語に積極的に関わる姿勢を育むことにつながっていくと考える。

6. 引用文献・参考文献

Yopp, H.K. (1992) "Developing phonemic awareness in young children." *The Reading Teacher*, 45, 696-703.

Adams, M. J. (1990). *Beginning to read: Thinking and learning about print*. Cambridge, MA: MIT Press.

アレン玉井光江. 2013. 「公立小学校における Synthetic Phonics の実践—アルファベット知識と音韻認識能力の発達—」『ARCLE REVIEW』No.7, pp.68-78. *Action Reserch for Language Education*.

太田かおり (2012) 「日本の英語科教育における音声指導の現状-初期英語教育における音声指導の導入及びその教授法の確立を目指して-」『九州国際大学社会文化研究所紀要』第 69 号,53-73.

西原真弓 (2008). 「英語科教育要請に必要な音声指導について」『活水論文集』活水女子大学健康生活学部編 第51号, 15-13.

『ももたろう』で英語を習得!? 新しい学習法「ジョイント・ストーリーテリング」とは」ベネッセ教育情報サイト (最終閲覧日: 2014年4月4日)

<https://benesse.jp/kyouiku/201404/20140404-6.html>

文部科学省 (2017).『小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編』開隆堂出版, p17.

ピアスーパーバイザーからのコメント

本稿は、「音韻認識」の確立と児童英語指導法の体得のカリキュラムの報告である。本学の学生は英語に興味はあるものの、苦手意識を持っているものも少なくはない。そのような学生に対し、本稿では苦手だからといって避けて通ることのできない英語教育を学生たちがどのように指導すればよいのか、また学生自身が苦手意識を持たずに英語に興味を持つにはどうすればよいのかという授業の取り組みが報告されている。

昔話を題材に、オペレッタ形式でグループに分かれて発表することで、楽しんで取り組んでいる。またその様子をビデオ撮影することで、自分たちの振り返りに繋いでいる。現場でもこの経験を生かし苦手意識を持たずに、子どもたちが英語に興味を持つきっかけ作りに取り組んでほしい。

(担当：田中 麻紀子)